

# 健聴者の手話学習における手話単語認知の二面性

小 田 侯 朗<sup>1)</sup>

## I 問 題

我々の日常生活でのコミュニケーションを考えると、一般にそれを言語的 (verbal) コミュニケーションと非言語的 (nonverbal) コミュニケーションに分ける。このことは視点を変えるなら、無数にあるコミュニケーション様式の中で言語がいかに重要な位置を占めるかを示すものであろう。すなわち言語的コミュニケーションの効率の良さ、表現の多様性などが他のコミュニケーション手段に比べ、質的に格段に高いとの認識があるのであろう。この差の主たる要因は良く知られているように音声による言語表現の特徴によるところが多い。その一つには Saussure, F. de の指摘する音声言語の恣意性 (arbitrariness) が上げられる。すなわち音声言語においては言語表現と意味内容の結びつきが必然的なものではなく、その言語ごとに習慣として定められていることである。言い換えるなら、音声言語においては表わすもの (signifiant) と表わされるもの (signifié) の間の因果性をその成立条件としないということであろう。このことにより音声言語による表現は、非常に多様でかつ高度な抽象性を持ち得るようになるわけである。また Martinet, A. により強調された二重分節、すなわち音声言語では意味を担う単位の第一次分節に加えさらに小さい音あるいは文字の第二次分節が存在することも、言語表現の多様性を支える大きな要因と言えよう。

一方、上述のような音声言語によるコミュニケーションの諸特徴を解明する研究に対し、同様に人間の言語ではありながらその発生の源を音声によらない、すなわち身振り言語によるコミュニケーションの問題が近年取り上げられるようになってきた。いわゆる手話 (sign language) であり、各国のろう者の間で主たるコミュニケーション手段となっている言語である。元来、事物の直接的な模倣を基礎として発展してきたと思われる手話には、音声言語とは異なった諸特徴が存在する。従来手話

研究の中で指摘されてきた点は、手話が現実存在する事物の模倣を基礎とすることから概念のヒエラルキーが形成されにくく、論理的・抽象的概念あるいは上位概念の表現が特に困難である点、一語多義であるため新語・学術語などを作りにくい点、表現が文脈に左右されやすいため同一の知覚場面、あるいは心理的な生活空間の中にいなければ相互に理解しにくい点などであった (佐藤, 1973)。このことは手話における恣意性の低さ、言い換えるなら写像性 (iconicity) の高さ、分節性の低さによる語彙の乏しさ及び表現力の制限を示すものであり、同時に言語の表現規則 (文法) の不整備によるコミュニケーション効率の低さを示している。

しかしながら、言語が常に変化するものでありそれを共有する社会の動きを反映する点を考えるなら、上記の特徴は言語のある発達段階における特徴ととらえ直すことができよう。実際に最近の手話研究の進展により、Klima, E. S. & Bellugi, U. (1979) はアメリカにおける伝統的手話 (American Sign Language = ASL) が歴史的に写像的なものから恣意的なものに変化していることを指摘している。また彼らは手話における造語の際、二重分節と対応できるような要素的な組み合わせが行なわれること、複合語 (compound) がその基になった単語の表現と微妙にそして体系的に区別されることも述べている。我国の伝統的手話については未だ十分な研究がなされていないため、Klima 等の述べるような状況がどの程度あてはまるか明確ではないが、同様の傾向は認められると言えよう (小田, 1981)。

このように変化する手話の諸特徴の中で、依然音声言語と際立った違いを示す特徴の一つは、当然のことであるが、手話がろう者のみに限らず人間が日常的に用いる身振りと同じチャンネルで表出され、知覚されている点である。すなわち、模倣あるいは身振りとして発生した手話はその発展の過程で上述のような言語的特性を整備していきながらも、依然身体表現としての身振りは同じチャンネルで存在するのである。したがってある手話表現が、特定の対象の個別的な特徴の模倣 (身振りの意味 = gestural meaning) を越え、その対象に代表される

1) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程 (後期)  
(指導教官 梶田正巳助教授)

より広範な一般概念あるいは上位概念（語彙的意味=lexical meaning）を表象するよう発展させられた場合、その語彙的意味には該当するが身振りの意味には該当しない対象を前にしたとき、ある種のジレンマが引き起こされることは想像できよう。現実に言語獲得の過程で手話を主なコミュニケーション手段としてきたろう者の場合、このジレンマは何らかの形で低減されるのかもしれない。この点の解明も一つの課題である。しかしながら、音声言語によるコミュニケーションを絶対的に優勢な手段とし、身振りによるコミュニケーションとの間に一線を画している健聴者にとって、身振りの中に音声言語に相当するような語彙的意味を付与していくことは、新しい体験であり身振り認知のとらえ直しと言って良いだろう。その意味で、健聴者の手話学習における上述のジレンマに伴う手話単語の認知の問題は手話研究での重要な課題と言えよう。

以上のような認識から本研究では、実験的にこのジレンマを引き起こすことにより、手話を後天的に学習する健聴者の手話単語認知の様相を明らかにすることを目的とした。

## II 方法

### 1. 被験者

名古屋市が主催する手話講習会の受講生及び講師72

名。被験者は全員健聴者であり、各人の手話学習期間の長さにより3群（G1, G2, G3）に分けられた。G1：手話を学習しはじめて一年未満のもの40名（平均学習期間4.0ヶ月）。G2：手話を学習しはじめて一年以上二年未満の者18名（平均学習期間16.2ヶ月）。G3：手話を学習しはじめて二年以上の者14名（平均学習期間38.3ヶ月）。

### 2. 課題

被験者には二つの課題が呈示された。形式はVTRにより呈示される手話表現<sup>\*</sup>を各被験者にあらかじめ配布された課題用紙の中の図と対応させるものであった。両課題ともに身振りの意味と語彙的意味を合わせ持つ手話単語を含む課題であった。以下課題ごとに説明する。(1)課題A：VTRにより呈示される手話表現は図1(a)に示されるものであり、指文字の「エ」と「ン」に続き「高い」という語彙的意味を持つ手話単語を表わしたものである。これに対応するのは図2に示す四種類の絵である。ここで問題になるのは「高い」の手話表現である。この表現を語彙的意味と認知するなら、四枚の絵の中で「円高」を図示するものが該当する。しかしこの表現を“下から上へ昇っていく状態”というように身振りの意

\* 男性手話通訳者が行なった。

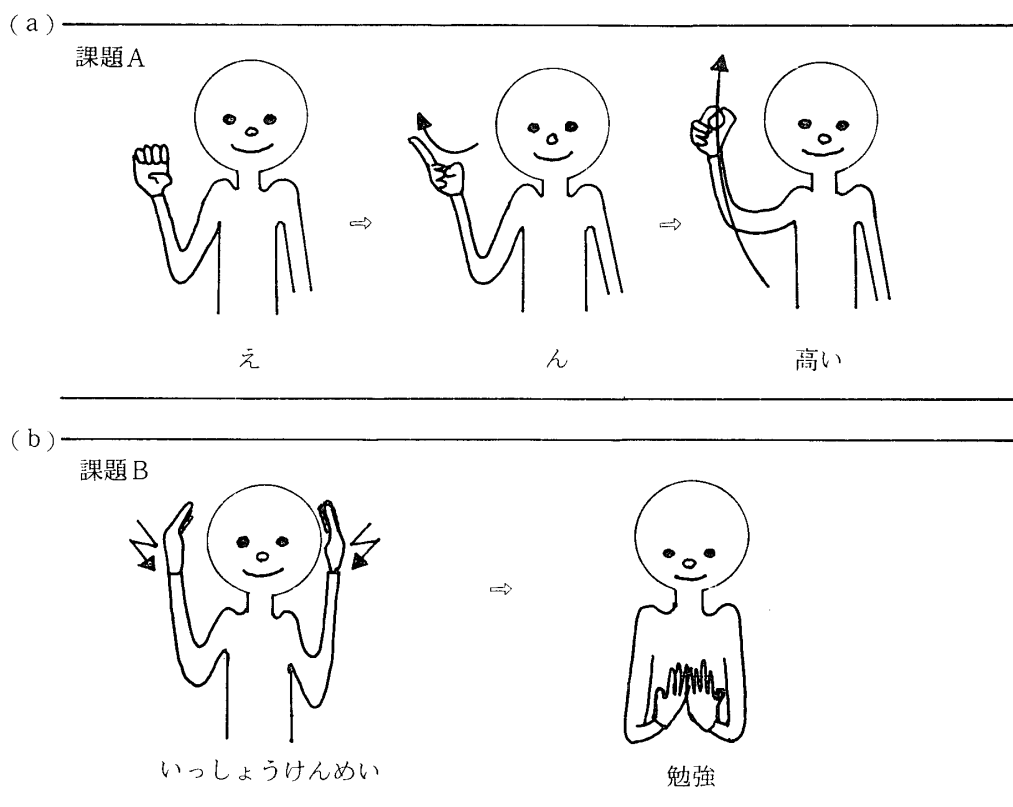


図1 VTRにより呈示される手話課題

原

著

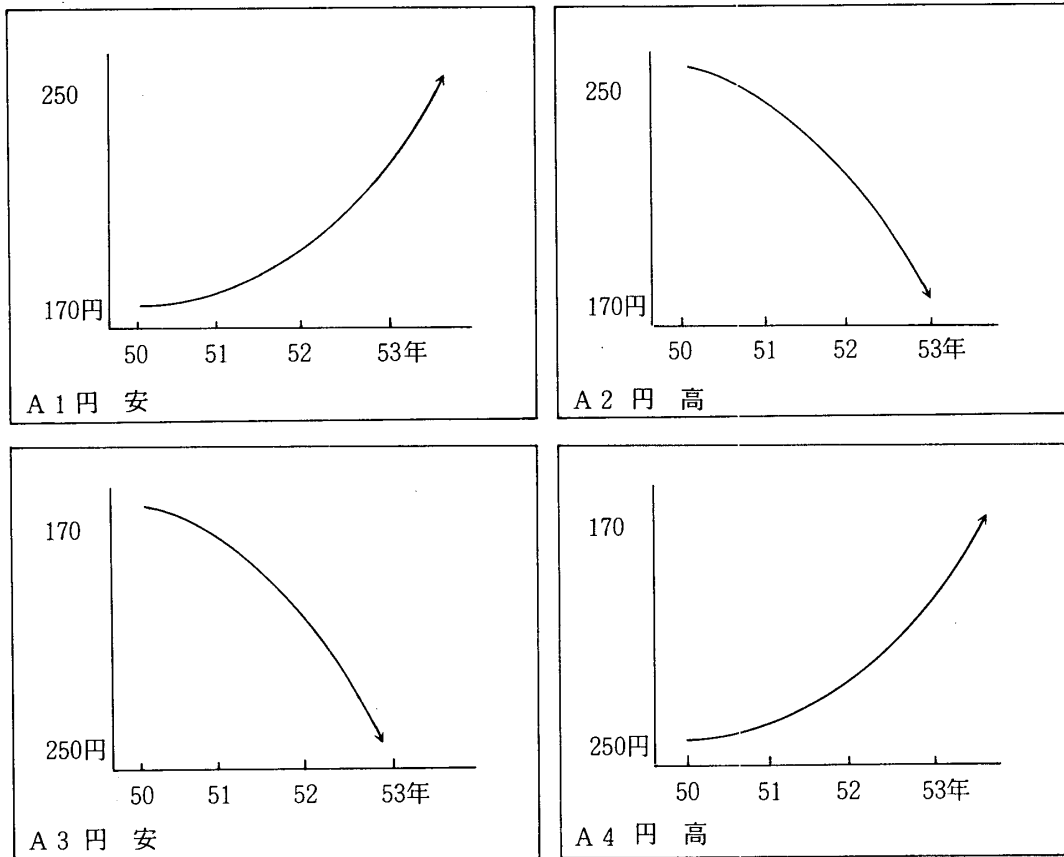


図2 手話表現と対照される絵 (課題A)

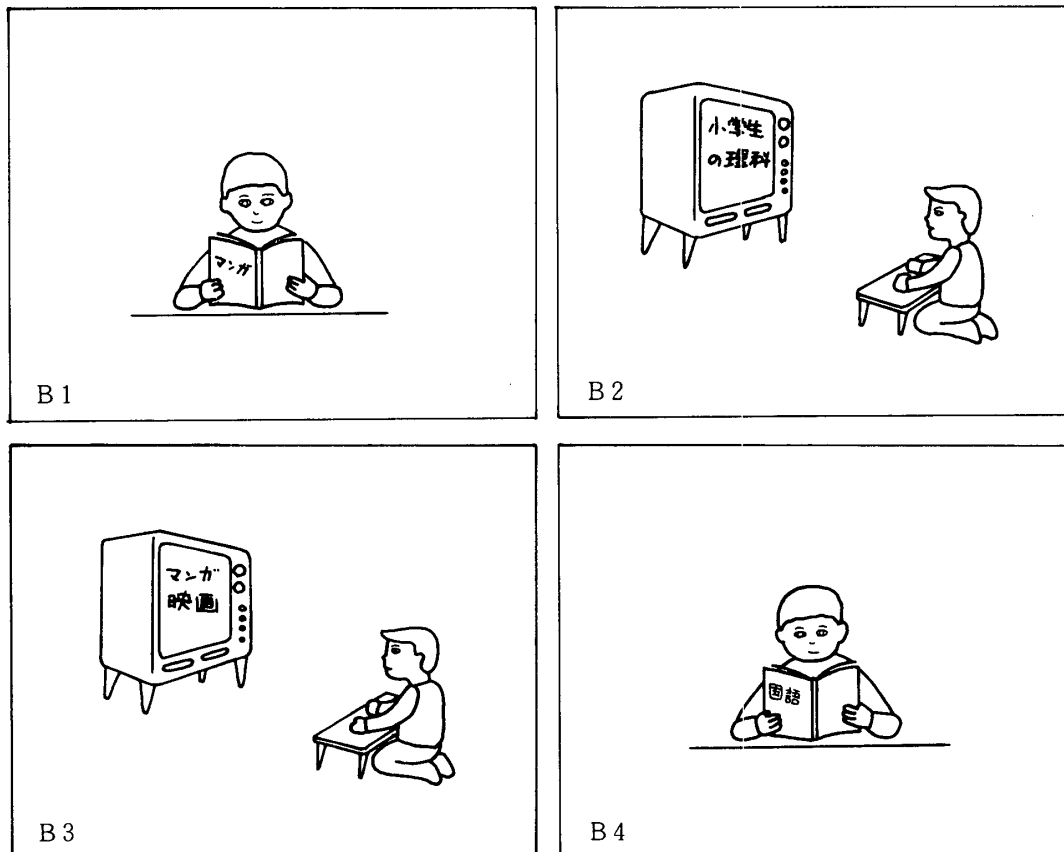


図3 手話表現と対照される絵画 (課題B)

味にとらえた場合、上昇曲線が描かれている絵が該当するものとなる。②課題B：VTR 呈示される手話表現は「一生懸命」及び「勉強(する)」の語彙的意味を持つ手話単語であった(図1(b)参照)。これに対応するのは図3に示す四枚の絵である。ここでは「勉強(する)」の手話が問題となる。この表現を語彙的意味とみなすなら、その対象が本であろうとテレビであろうと関係なく、B(2)及びB(4)の絵が該当する。しかしこの表現を“本を読んでいる状態”のように身振りの意味に受け取ると、勉強するしないは問題ではなくなり、B(1)及びB(3)がその該当する絵となる。

3. 手続

それぞれの課題の手話表現はVTRにより二度ずつ呈示された。被験者はVTRで呈示される課題の手話表現を観察したのち、配布された課題用紙の絵と対応させ、表現された手話の内容を表わしていると思う絵には○を、そうではないと思う絵には×を記入するよう教示された。また実験に際して呈示される手話に対する説明は一切行なわれず、その手話をどう認知するかはすべて被験者に任された。そのために課題として用いられる手話は、講習会でまず最初に学習される「わたしたちの手話(1)」（手話法研究会編）を中心に選択し、名古屋の手話方言をも考慮した。

4. 分析

被験者の反応はカテゴリー化された。その詳細は表1に示す。

また分析に際し被験者は手話学習期間の長さとは別にこの実験に先だち行なわれた手話の読み取りテストでの正答数により二群に分けられた(NCR群：6項目すべてが誤答であった者22名, CR群：6項目中2項目以上の正答を示した者25名)\*。このテストは「AがBにCを渡す(与える)」という内容の手話表現であり、A・B・C

表1 課題絵画選択の反応カテゴリー

カテゴリー名	説明
C1	: 課題の手話を語彙的意味と認知する反応
C2	: 課題の手話を身振りの意味と認知する反応
C3	: 課題の手話を語彙的意味かつ身振りの意味であると認知する反応
C4	: 課題の手話を語彙的意味あるいは身振りの意味であると認知する反応

の各対象を相互に入れ換えることで6種類の項目を作成した。詳細は表2, 表3及び表4に示される。表現者は24才のろう男性であり、彼が日常用いる自然な手話表現を行なった。またここで表現されるA・B・Cの各対象についてはあらかじめ被験者に説明された。

表2 読み取り課題の表現項目説明

項目	手話表現内容
A1	くま(B)がさる(C)を人(M)に渡している
A4	くま(B)が人(M)にさる(C)を渡している
A6	さる(C)がくま(B)に人(M)を渡している
A6	さる(C)がくま(B)に人(M)を渡している
B1	人(M)がさる(C)をくま(B)に渡している
B1	人(M)がくま(B)にさる(C)を渡している
B4	経験(B)が規則(C)を権利(A)に与える
B4	経験(B)が権利(A)に規則(C)を与える
B6	規則(C)が権利(A)を経験(B)に与える
B6	規則(C)が経験(B)に権利(A)を与える
B6	権利(A)が規則(C)を経験(B)に与える
B6	権利(A)が経験(B)に規則(C)を与える

表3 課題の手話表現表記上の略語説明

略語	説明	略語	説明
A	権利	F	～から
B	課題Aでは くま 課題Bでは 経験	E	ある
C	課題Aでは さる 課題Bでは 規則	P	～した
M	人	N	中央
G	渡す・与える	R	向かって右側
T	もらう・受け取る	L	向かって左側
I	それ	LH	向かって左上
			(* 位置が記入されていない場合はN)

\* CR群の平均手話学習期間は13.0ヶ月  
NCR群の平均手話学習期間は14.1ヶ月であった。

表4 読み取り課題の手話表現

項目 語順	A <sub>1</sub>	A <sub>4</sub>	A <sub>6</sub>	B <sub>1</sub>	B <sub>4</sub>	B <sub>6</sub>
	M	C R	M R	B R	C R	A R
	B L <sup>H</sup>	B L	B L	A L	B L	B L
	F L <sup>H</sup>	G R→L	G R→L	G R→L	G R→L	C
	C	I L	I L	I L	I L	G R→L
	T LH→N	M L	C L	C L	A L	P
	P	E L	G R→L		E L	
			E L			
			P			

### III 結果

#### 1. 課題間の比較

四種類のカテゴリーの出現様式を調べるために、まず両課題の散布度が検討された。その結果、課題Aにおける集中度係数  $C = .427$  ( $N = 72$   $K = 4$ )、課題Bにおける集中度係数  $C = .316$  ( $N = 72$   $K = 5$ )であり、若干課題Aでの集中度が高いことがわかる。そこで両者の集中度の差を検定したが、明確な差は認められなかった ( $t = 1.852$ ,  $df = 13$   $p < .1$ )。これは以下に示す図4及び図5からもわかるが、C3を中心に各カテゴリーが分布しており、両課題ともほぼ同様の出現様式を示していることによるものであろう。

#### 2. 手話学習期間による差

各課題ごとに、手話学習期間の長さによりそのカテゴリー出現様式に差が見られるかを調べた。連関の有意差検定の結果、課題A・BともにG1, G2, G3の間に有意な差を認めることはできなかった。さらに各カテゴリー

で3群の出現率に差が見られるかを調べたが、課題AのC1において若干の傾向 ( $\chi^2 = 4.911$   $df = 2$   $p < .1$ ) が認められたのみで、他のカテゴリーについては両課題ともに明確な差は認められなかった。また課題AのC1, C2及び課題BのC1, C2, C3の3群による単調増加(減少)傾向を確認するために Bartholomew の法による傾向検定を行なったが、いずれも有意な傾向は認められなかった。この3群の各カテゴリーごとの出現率を課題ごとに示したものが図4及び図5である。

#### 3. 手話読み取り能力による差

NCR群とCR群とでカテゴリー出現様式に差があるかどうか調べられたが、両課題ともに有意ではなかった。また各カテゴリーごとに両群の出現率の差を調べたところ、これも両課題の全カテゴリーで有意ではなかった。この手話読み取りテストにおける正答数別のカテゴリー出現率は図6及び図7に示されるが、ここからは先の手話学習期間別のカテゴリー出現様式とは若干異なった出現様式が見られた。

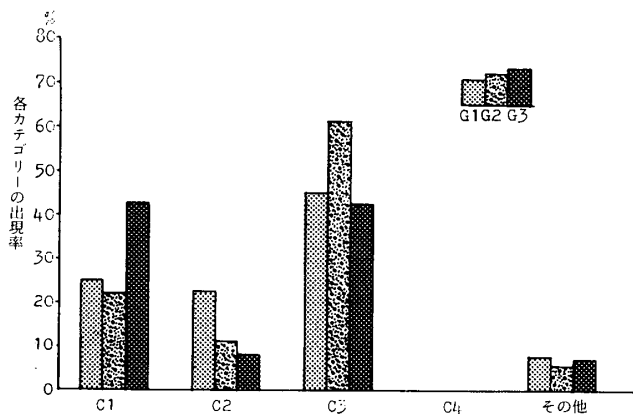


図4 手話学習期間別カテゴリー出現様式 (課題A)

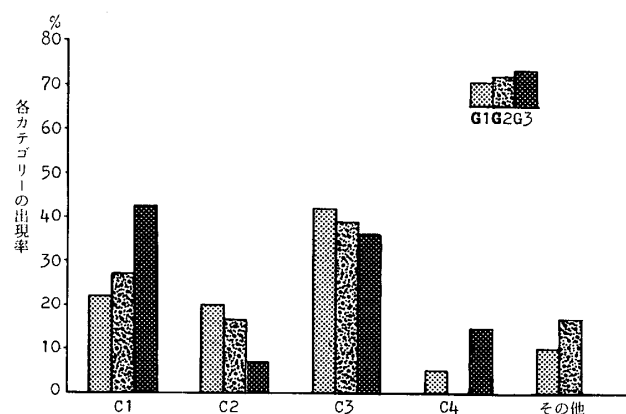


図5 手話学習期間別カテゴリー出現様式 (課題B)

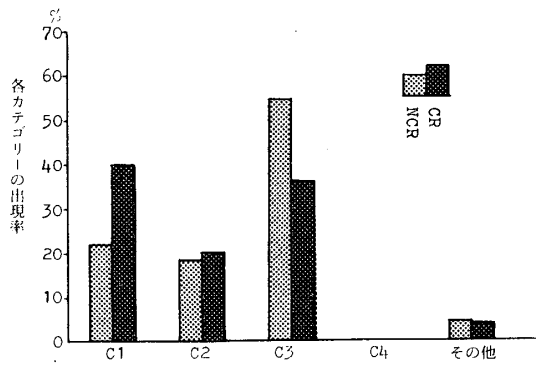


図6 手話読み取り能力カテゴリー出現様式(課題A)

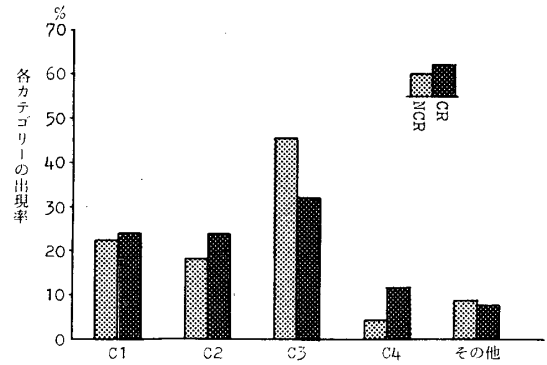


図7 手話読み取り別能力別カテゴリー出現様式(課題B)

#### IV 考察

結果に見られるように、本実験ではほとんどすべての検定において有意な差を確認できなかった。しかしながら、このことにより即、手話の学習期間の長さ、あるいは手話の読み取り能力の違いによる手話単語認知の差はないと断定することには問題がある。なぜなら、明確とは言えないながらも、図4、図5及び図6、図7には一定の傾向を感じさせるものがあるからである。以下、結果にもとづく充分説得力のある論証と言うよりは、多少解釈の拡大にはなるが上記の図4～7を中心にこれからの研究の方向をある程度明確にする意味で考察を進めてみたい。

まず手話学習期間別の各課題におけるカテゴリー出現様式を見ると、C3、次いでC2の出現率が高く、3番目の出現率を示すC2とこの両者の間には幾分の差がある。すなわち、全体としては課題の手話表現を語彙の意味と認知する傾向が、それを身振りの意味と認知する傾向を上まわっている。さらにこれをG1、G2、G3の3群で比較してみると、課題AのC1でのG1、G2の順位を例外として、C1では学習期間が長くなればなるほど出現率が増加し、C2では逆に学習期間が長くなるほど減少の傾向を見せている。すなわち学習期間が長くなるほど、課題の手話を身振りの意味ととらえる割合が減少し語彙の意味ととらえる割合が増加していることを示す。このことは被験者が手話の学習経験を積むほど、手話表現を単なる身振りから切り離し、規約に基づいた語彙の意味をもつ言語とみなすようになることを意味すると言えよう。

また手話の読み取り能力別のカテゴリー出現様式を見ると、C3が各カテゴリーの中で最も出現率が高いという点では図4及び図5と同様であるが、むしろC1、C2とC3との間の差が顕著である点で異なる。ここでもし

手話の学習期間の短い者が読み取り能力の低い者に対応し、同様に長い者が高い者に対応すると考えるならC2において矛盾が生じることになる。C2の出現率の傾向はこの両者において逆転しており、手話の読み取り能力に関しては、能力の高いものがより課題の手話表現を語彙の意味とみなす傾向があると言えないのである。

この際考えなければならないのは、読み取りテストの内容であろう。ここで用いられた手話表現はろう青年の自然な手話表現であるが、そのために単なる辞書的な表現にとどまらない表現が見られる。一例としては「渡す」の表現が上げられる。語彙の意味での「渡す」は手のひらを上にむけ、自分の胸元から前方に向けてその手のひらをさし出す動作になっている。しかしながら、VTR中の彼の表現は右から左へ手を移動させる方法に変化しており、Klima, & Bellugi (1979) が指摘している、手話における屈折的な表現と言える。彼の他の表現にも同様の例が見られ、空間を有効に使用する視覚的言語として独自の屈折を示す手話を良く表わすものとなっている。

彼の手話表現に見られるこの種の屈折は、手話表現の語彙の意味の側面のみを理解し、基本型のみを認める学習者にとっては、表現のくずれ、異なった表現、あるいは単なる身振りともみなされやすい。語彙の意味をもつ手話単語がその視覚的言語としての特性ゆえ、音声言語における屈折とは異質な屈折を空間を利用して繰り広げることとはごく自然なことであり、その規則性こそがまさに手話表現における文法と言い得るものであろう。

したがって、ここでの彼の手話表現を適切に理解するためには、手話単語の基本型とともにその屈折の規則性に対する理解が必要になると言えよう。そしてこの屈折自体が同じ身体表現として繰り広げられる身振りにおける規則性と少なからず関連を持つため、CR群でのC2の出現率が高くなったと考えられる。

現在の多くの手話講習会では日本語を手話に置き換えることが中心となっている。また手話の屈折表現等の規則性の説明は現在のところ充分ではなく、個人の体験に基づく理解にまかされているところが大きい。手話講習会による手話学習期間の長さが、必ずしもろう者の手話表現の読み取り能力の向上につながらないのは、以上のような理由によるのではないだろうか。筆者は、手話学習を始める者がはじめ言語（音声）とは不連続であった身振りを言語と認知し、それ以外の身振りとは切り離していく過程と、真に手話表現を理解するためさらに手話を身振りにとらえ直す、すなわち手話における視覚言語特有の空間的表現規則を理解していく過程の2段階の過程を考えている。本実験では手話における語彙的意味の側面と身振りの意味の側面を対立させることで、手話の特質を解明しようとしたが、結果は明確なものでなかった。今後はろう者の自然な手話表現の規則性を解明することにより、それとの関係でさらに詳細にダイナミックな手話認知の問題を検討していきたい。

## 文 献

- Klima, E. S. & Bellugi, U. 1979 *The Signs of Language*.  
Harvard University Press.
- 小田侯朗 1981 伝統的手話の構造について—ASLとの比較を通して—教育心理学論集—名古屋大学大学院教育学研究科教育心理学専攻—, 第11号, 24—34.
- Prieto, L. J. 1972 *Message et Signaux Presses Universitaires de France*. (丸山圭三郎訳 記号学とは何か—メッセージと信号—人間の科学叢書, 1974 白水社)
- 佐藤則之 1973 手話について 言語生活, 3, 40—48.
- 手話法研究会(編) 1969 わたしたちの手話(1)  
全日本聾啞連盟

(1982年7月31日 受稿)

## TWO ASPECTS OF THE SIGN COGNITION ON JSL LEARNING BY HEARING ADULTS

Yoshiaki ODA

The aim of the present study was to examine the cognition of the Japanese Sign Language (JSL), which has two meanings as both the individual imitation of the object (gestural meaning) and the general concept universalized from the imitation of the specific object (lexical meaning).

The subjects were 72 hearing adults attending to a training course of JSL sponsored by Nagoya City. They were divided into three groups according to the length of the sign language learning experience.

G1: 40 hearing adults (mean learning term was 4.0 months).

G2: 18 hearing adults (mean learning term was 16.2 months).

G3: 14 hearing adults (mean learning term was 38.3 months).

Two items of JSL signing were presented as the task. Subjects watched these signing on VTR and then was asked to choose pictures he considered suitable according to their interpretation of the task. Their responses were classified into four categories and miscellaneous.

The major results were as follows: First of all, the difference among the three groups was examined. However, there was no significant difference in the observed rate of each category between them. Then, we examined the difference in the observed rate of each category between two groups, into which they were divided according to their scores on a test of sign reading: Group NCR (lower) and Group CR (higher). We also found no significant difference between them.

As mentioned above, the difference between groups were not statistically significant. On further examining the patterns of category appearance of various groups and other results, however, we were able to assume some tendencies in the data. The experienced learners tended to recognize the task as one which had the lexical meaning, while not few of the beginners tended to recognize it as one which had the gestural meaning. And the pattern of category appearance rate in the experienced learners was in part the reverse of that in Group CR. Similar reversal was found in the relation between beginners and Group NCR. These findings may suggest that two processes are necessary for understanding the sign language. The one is a process which separates the sign from daily gesture, and recognizes it as the language having a lexical meaning. The other is a process in which one finds common rule of expression between the sign language and daily gesture.